

迷

路

駅を降り、炎天下広い公園を歩くと、
街館に着いた。

「M書道展」に入道したという通知を受取

ったので観に来た。いつながら「世の中に

これほど多くの書道愛好家がいのか」と驚

くほど出展が多い。だから、受付で訊いた。

「入選の通知をいたしたのですが、どの	部屋に展示されたのでしょうか？」	「おめ下とうございます。ちよっとお待ち	ください。早速お探しします」と、実直そう	な書道関係者はや、厚い名簿を繰っていた。	何度も頁を繰って、いとお、私の名前が見当	らないように、隣の女性と小声で話をし	て、い。そして私に向か、て小声で、いから	恐縮した様子で言った。	「誠に失礼ですが、当選されたという当会
--------------------	------------------	---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------------	----------------------	-------------	---------------------

					を 知					
「	「	ま	少	「	を	「	や	よ	か	ら
少	ま	い	な	「	出	の	は	う	ら	の
ん	さ	「	お	破	し	中	「	か	の	お
お	か	「	待	か	。 交	の	持	し	お	知
待	展	「	ち	に	付	黄	っ	ら	ら	せ
ち	示	「	く	当	の	色	「	見	セ	を
下	の	「	た	會	男	い	き	見	見	見
さ	中	「	だ	本	に	「	「	セ	「	「
い	に	「	さ	部	差	「	「	「	「	「
。	な	「	い	の	し	「	「	「	「	「
す	い	「	い	入	出	「	「	「	「	「
ぐ	の	「	い	選	した	「	「	「	「	「
戻	ど	「	い	通	。	「	「	「	「	「
「	は	「	い	知	。	「	「	「	「	「
ま	「	「	い	で	。	「	「	「	「	「
す	「	「	い	す	。	「	「	「	「	「
の	「	「	い	ね	。	「	「	「	「	「
ど	「	「	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「
」	」	」	い	。	。	「	「	「	「	「

伊東屋

たの	入	選	作	に	つ	い	て	は	実	は	ト	ラ	ブ	ル	が	あ	り	ま
	ッ	申	し	訳	あ	り	ま	せ	ん		お	待	た	せ	し	て	あ	な
胃	が	戻	っ	て	ま	た	。											
他	の	入	選	者	の	作	品	を	眺	め	て	い	た	ら	、	や	っ	と
い	っ	て	ま	せ	ん	し												
ま	す	の	下	、	ど	う	や	お	呼	び	下	さ	い	。	遠	く	つ	は
の	近	く	の	部	屋	の	作	品	を	見	さ	せ	て	い	た	ど	い	て
間	に	耐	え	て	い	た	が		私	は	我	慢	し	ま	ぬ	が	、	
経	つ	。	受	付	の	井	下	の	女	性	と	互	い	に	重	苦	し	い
																		時
																		か

展	真		私		く	レ	い	し	し
示	直	展	の	ア	ア	イ	ま	た	て
さ	ぐ	示	作	ウ	ウ	ア	し	。	、
れ	、	さ	品	ト	ト	ウ	て	も	こ
て	奥	れ	は	ミ	ミ	ス	あ	ち	の
お	へ	て	展	ス	ス	ア	な	ろ	入
り	へ	お	示	ア	ア	し	た	ん	送
ま	と	り	さ	し	し	て	あ	、	作
す	お	ま	れ	て	て	ー	な	あ	陳
し	進	す	て	い	し	と	た	な	列
	み	。二	い	い	と	、	の	の	リ
	下	階	い	人	弁	そ	作	作	ス
	さ	の	い	で	明	そ	品	品	ト
	い	13	い	ず	が	水	は	は	か
	。一	室	い	お	く	は	入	入	ら
	番	の	い	ひ	ど	当	送	送	減
	奥	奥	い	が		方	さ	れ	て
	に	を	い	く		の	れ	い	い
			い	ど			し	ま	ま

「よか、た。二階の奥の奥下すね」

「A、B、Cと三室あり、真ん中のB室の

奥の奥下す。それから申し訳ありません、

もう五時で五時半の閉館で消灯になりますので

「五時半にはこの受付までお戻りいただきたいま

たいのです」

「わかりました。自分の作品だけ見たら、

すぐ戻っ「きます」

「ゾ存知と思っておりますが、M書道展の総去品の

数は二万五千下、入送作だけで約千点です」

全国から
ここに掲示されているよ

も	私	」。	私	時	進		礼	お	の
他	は	よ	の	計	め	日	を	上	で
の	小	き	視	は	」。	室	言	↑	敷
人	走	界	は	」。	。	っ	く	が	
の	↑	を	に	も	」。	こ	っ	た	多
作	に	し	立	う	」。	れ	っ	さ	い
品	な	て	派	五	」。	が	っ	い	い
ば	り	い	な	時	」。	ま	」	い	ま
か	だ	と	書	十	」。	た	二	す	ず
り	し	暇	道	五	」。	大	階	。	ど
だ	た	は	作	分	」。	き	へ	ど	う
	。	な	品	だ	」。	い	向	が	が
	行	い	が	。	」。	。	か	急	急
	け	。	入		」。	奥	っ	い	下
	ど		っ		」。	へ	た	下	二
	も		て		」。	奥		二	階
	行		く		」。	へ		階	へ
	け				」。	と			
	ど				」。	歩			
	を				」。	を			

一 休、私が入選したという通知は本当
 だ、たのびうか。あの交付の男も、あな
 たは当選さまでいますよと云っていただけはな
 いか。
 汗が出た。時計を見よともう五時二十
 分だ。自分の入選券を見よとすぐ列進し、全力
 疾走して五時半に間に合いうら下ギリギリだ。
 私は疲れ出した。息が上がってきた。
 苦しい。

9

私は	奥の	●展示	時計	私は	深呼吸	うに	作品	その
は	の	会	を	は	を	輝	が	の
走	部	場	見	元	吸	い	あ	瞬
り	屋	の	た	来	を	て	っ	間
出	か	照	路	た	し	見	た	展
した	ら	明	順	路	て	え		示
、	に	が	を	を	た	た		の
入	一	一	違	凝				一
口	区	区	に	視				番
に	間	間	歩	し				最
店	が	が	み	た				後
た	つ	つ	だ	あ				、
め	消	消	し	と				端
に	え	え	た					の
。	て	て						端
	い	い						に
	く	く						私
								の

伊東屋

10/10

令和三年八月十三日

また一つ照明の消えて闇となす。

私は逃げ下。闇の追っ駆けてく下。

遂に闇が私に追いついた。

展示室はすべて暗黒に包まれた。

一体どうすればいいのだ。こんな迷路に置

きながらさ木下！

了

伊東屋